

大志をもって

はじめに

私が他人史のキャリアモデルとして選ばせていただいたのは、境山哲夫さん、通称まねび先生です。まねび先生は、83歳となった今も日本の英語教育を変革しようと奮闘なさっています。私がまねび先生をキャリアモデルに選ばせていただいた理由は2つあります。1つ目は、まねび先生とお話させていただいたときに、たくさんのキャリアを積み重ねていることに驚き、もっとまねび先生のキャリアについて知りたいと思ったからです。2つ目は、80歳を超えてもなお好奇心が旺盛で、学びつづけるということを継続しているこの原点はなんだろうか。と、興味をもったからです。

まねび先生の「4つの顔」がどのように今のまねび先生を形成しているのか。80歳を超えてもなお魅力あふれるまねび先生はどんなキャリアを積んでこられたのか。という点に意識しながら読んでほしいです。

私とまねび先生との出会い

私は、中学生のとき、英語の発音に自信を持てずに過ごしていました。そんなある日、下校中の電車でたまたま同じ小学校で、小学生の時から英語をペラペラとしゃべっていた同級生Mさんに出会い、「どこかい英語教室知らない？」と、聞いたところ「私も行ってたまねび学園はどうか？」と、教えてもらったことがきっかけで私はまねび先生が主宰しているまねび学園に通うことになりました。たまたま久しぶりに出会ったその友達におすすめの英語教室を聞いていなかったら、私はまねび先生と出会っていなかったと思います。

まねび先生と深く関わらせていただくことになったのは、私の中学校で毎年行われる英語暗唱大会でご指導いただくようになってからです。まねび先生は、英語スピーチ・暗唱、英語落語を教えるプロでした。地元の伊丹市・尼崎市中学英語暗唱・スピーチ大会では18年連続でまねび先生が指導した生徒が入賞しています。そんなまねび先生に英語スピーチを授業時間問わず、本当に懸命に指導していただきました。先生の指導もあって私はその中学英語暗唱大会で3位に入賞することができ、この経験があったからこそ今自信をもって英語を話している自分がいます。

今でもまねび先生とおつきあいを続けさせていただき、幼児・児童クラスのアシスタントをアルバイトで携わり、Wordで入力するなどして先生の執筆活動に少し手伝っています。また、これは中学校の時から変わらないのですが、先生と授業外でお会いすると近くの喫茶店に行っておしゃべりをしたり、ときには英語教育についてのお話を伺ったりもしています。私にとってまねび先生は、超えることがきかない英語の優秀な指導者であり、他愛のない話を笑ってくれるおじいちゃんでもあります。

米兵、そして英語とチョコレートとの出会い

まねび先生は、鹿児島県鹿屋市で少年時代を過ごしました。6人兄弟の長男で、小さいときから、人を喜ばすことが好きで、絵を描くのが得意な少年だったそうです。絵に関しては、西日本新聞の絵画コンクールで何回も入賞するレベルで、親戚の間で絵の天才少年だ。と、言われていたそうです。

戦後間もないある日、まねび先生が小学4年生のときです。先生はいつものように市の中心を流れる川で魚すくいをして、家に帰って屋外の洗い場で足を洗っていました。そのとき、地面に自分以外の陰が現れたと思い、驚いて背後を振り向くと「ワラ、ワラ」と微笑みながら水道の蛇口を指さしている大柄な米兵が立っていました。「ワラ」は、water(水)のことで、その英単語がはじめてまねび先生が生で聞いた英語でした。そして、その米兵は水を飲み終わると紙包みに入ったチョコレートを渡して、手を振って立ち去ったそ

うです。その場で食べたチョコレートは、ほろ苦い甘い味であったと教えてくれました。

英語大好き少年へ

その米兵との出会いによって、まねび先生の人生は大きく変わっていきます。まねび先生にとって、通訳士や英語を話せる人は輝いて見えて、英語は身近で憧れの言語になっていきました。

しばらくしてまねび先生の町にキリスト教会ができたことを機に、好きな英語を聴きくために毎週日曜日にアメリカ人宣教師の礼拝をいつも前席中央に座っていたそうです。そんな英語大好きな心は中学に入っても変わらず、NHKラジオ英語会話講座を毎日欠かさず、5分前にはラジオの前に座って聞き続け、どんどん英語が上手になってどんどん好きになっていきました。

中学3年生の夏、先生の地元である大隅地区で第1回中学英語弁論大会が開かれ、1位を受賞しました。当時、英語がまだ入ってきたばかりの日本で1位をとったのと等しいかったので、父親は非常に喜び、当時としては超高価な英語の辞書を購入してくれたそうです。今でも父親の喜んだ顔が忘れられないとも話していました。

偉人の町で育まれたスピリッツ

まねび先生が中学3年生の2学期、父親の職場異動により鹿屋市から鹿児島市へ移ってきました。鹿児島県立鶴丸高校に入っても英語好きは変わらず、自宅から2時間歩いてアメリカ帰りの夫妻が経営している英語教室に通ったこともあったそうです。今までと大きく変わったことと言えば、高校時代過ごした場所、つまり鹿児島市鍛冶屋町の影響が大きかったようです。鹿児島市といえば、西郷隆盛、大久保利通などの幕末維新、日清・日露の偉人たちの生育地として有名です。そんな場所でまねび先生は、その土地に住んでいるみんながもっている「全国的な視野を持ち、志を大きくもとう」「国のために尽くそう」というような気風の中で高校生活を過ごしました。この環境で育ったことがまねび先生の生い立ちの中で最も大きい影響として残っているとおっしゃっていました。そのスピリッツは、60年以上たったいまも「日本人を英語が話せるような国民にしたい」という想いをもって執筆活動されていることが十分あらわれています。

塾経営を大学時代に始める

家が貧しかったまねび先生は、兵庫県尼崎市で牛乳販売業を営んでいた従兄弟をたよって関西に来ます。朝3時に牛乳配達の手伝いをして、弟2人を学校に行かせながら、神戸商科大学（現在の兵庫県立大学）へ往復4時間かけて通学していました。一見牛乳配達の手伝いは大変そうに思えますが、まねび先生は牛乳を待っている人がいて、その人たちから感謝されることで「自分が働くことで人に喜んでもらえるんだ」と実感し、一度もしんどいと思ったことはなかったそうです。そんな大学生活をしていた大学2年の春、たまたま高校1年先輩のTさんと福知山線の車内でばったり会いました。その頃、互いに苦学生をしていたこともあり、「塾でも経営しないか？」という先輩の誘いを受けました。そうと決まれば早速伊丹へと引っ越し、お寺の1室を借りて寝泊まりしながら「学生塾」を立ち上げます。そして、この塾で初めて「先生」という経験をします。生徒の成績が伸び、その親御さんが喜び、子供も喜んできてもらって教えることに喜びを感じたそうです。しかし、そのとき「自分は小さいころから英語がある程度しゃべれるのに、なぜこの生徒たちはしゃべれないのだろうか。」と、疑問に感じたそうです。これが、のちに幼児・児童英語教室を創設する際に大きなカギになっていきます。

漫画オタクからついた考える習慣

まねび先生が大学3年のときに、趣味で描いていた漫画をT先輩が見て「プロの絵やね」

という、一言に有頂天になりました。その頃から、漫画の独学を始め、新聞や漫画雑誌に投稿するための漫画のアイデアを出すために必死に毎日、毎日、寝ても覚めても、四六時中考えるという習慣がついたそうです。

グリコでポッキー

まねび先生は、大学の学生部長の「グリコは広告の企業で、君は漫画が好きだからどうだね？」という、勧めで江崎グリコに就職しました。

グリコでは、商品開発課に配属され、「アイデアはどうすれば生まれるのか？アイデアが出る人と出ない人とは、どう違うのか？」という点に関心を持ちます。そして、アイデア発想のメカニズムに興味を持つようになり、脳科学(大脳生理学)関係の本をむさぼるように読んでいたそうです。

そして、大学時代に漫画のアイデアを必死になって考えて考え抜くという習慣は、ここグリコに入って商品開発をするようになっても引き続き発揮されました。それによって生まれた商品は、日本人みんなが知るポッキーとクリームコロんです。

まねび先生は、ポッキーチョコレート開発秘話について教えて下さりました。そもそも、グリコにはポッキーが開発される以前にプリッツがありました。そのため、多くの人は、これにチョコレートを掛け、手が汚れるからアルミホイルで包むというアイデアだったそうです。ですが、そのようにアルミホイルで包んでしまうとその分コストがかかってしまいます。あれこれ考え、何度も試作をして、まずアルミホイルを外しチョコレートの量を減らすことで原価を大幅にコストダウンでき、現在のような形になりました。しかし、製造部は「機械化が難しい」と乗り気ではなかったそうです。そこで、テスト品を実際に作って小売店で販売して売れることを証明することにしました。すると、試作品はプリッツにチョコレートがボコボコついて、見た目が悪く売り物にならなかったそうです。今までプリッツを溶かしたチョコレートに縦方向で突っ込んでいたのを、今度はまな板の上にチョコレートを薄く敷いてプリッツを横に転がすというアイデアを出しました。それが本番に近いテスト品生産にも成功したそうです。このアイデアが功を奏し、ポッキーはヒット商品になりました。

アイデアに対する低い評価

まねび先生は、ポッキー以外にもクリームコロなどの開発も担当もされたそうです。しかし、「ポッキーは社長賞に値しない」などアイデアに対する評価が低く、まねび先生は残念な思いをされたそうです。しかし、今となっては、ポッキーがヒットしたとき社長賞をもらわなくてよかったかもしれない。もし社長賞をもらっていたら、その現状に満足して幼児・児童英語教室をつくらなかったはずだ。と、おっしゃっていました。

ループ先生との出会い

週休5日制になって、奥様の協力で近所の子に教える土曜英語塾を考えていたころ、まねび先生はたまたま受けた大阪の某英会話教室で一番上のクラスに選ばれ、生徒が2人で先生に指導を受けることになりました。その先生こそが、まねび先生とまねび学園の創設に携わり、この先39年以上のおつきあいすることになるアメリカのシカゴ出身で、スタンフォード大学大学院の外国語教授学を専攻され、英語のみならずドイツ語・フランス語・スペイン語・日本語が堪能な語学天才であるループ(Rube Redfield)先生だったのです。ループ先生とまねび先生は、学校を飛び出しビールを飲みながら語り合っていたそうです。そして、まねび先生は自分が幼児・児童英語教室をつくりたいとの想いを伝え、ループ先生に指導法・教材づくりに協力してほしいと頼みました。

退職後、英語落語をはじめ

退職後まねび先生は、60歳を超えてから英語落語に挑戦し始めます。大阪市北区のHOE

英語落語道場へ通って、2年後にはスカパーテレビの「24時間英会話番組」にまねび先生が演じた英語落語「ちりとてちん」が放映されるまでになりました。今では小中高生にも英語を時々教えられ、私をまねび先生に紹介してくれた小学校の同級生Mさんは、こども英語落語全国大会で2度も日本一に輝きました。そして、英語落語で学んだジェスチャーは、児童英語でも活かされることになります。

幼児・児童英語へのアイデア発揮

まねび先生は、持ち前の考える力を発揮し、幼児・児童英語教育でのSST(Sound Shower Technique)メソッドと呼ばれる新しい方法を生み出しました。それは、子どもに中学初級レベルの英語のシャワーを浴びせて教える方法でした。この考えに周囲の人たちは「そんなこと子どもたちができるはずがない」「子どもに中学英語のシャワーを理解させるなんて無理だ」と言われたそうです。しかし、まねび先生は周囲の反論にめげず、今まで培ってきた考え抜くということを日々続けていきました。そして、英語のシャワーで理解の手がかりとしてカタカナ英語(外来語)に着眼します。カタカナ英語を調べてみたころ、子どもでもわかるようなカタカナ英語がたくさんでてきたので、それをキーワードにセンテンスをつくらうとしました。センテンスをつくるくことになると名詞のみならず動詞も必要となったのですが、調べると動詞にもたくさんカタカナ英語がありました。動詞もアクション動詞に限定することで、身体を動かすことで運動性記憶として残るようにしました。そして、32のキーワードと32のキーセンテンスを英語のシャワーに散りばめるという方法をあみだしたのです。

まねび先生が場面設定の絵を描いて、ループ先生にはその場面を描写した英語をつくってもらうことをお願いしました。場面の英語(Scene)、物語説明の英語(Narration)、独り言の英語(Monologue)、対話(Dialog)をループ先生と出来上がっていきました。

さらに、「子供に英語を教える」という本があり、動物の絵が描かれていて、動物の名前が英語音声で流れる本を、先生の娘さんが幼いときにトントンと絵を指でタップしていたことを思い出し、トントン学習といわれる音と絵をリンクさせてイメージ的に学ぶリスニングゲームの学習法を思いつきました。そして、指先の末梢神経を刺激すると脳が活性化すると知ったまねび先生は、トントン英語を開発されました。それは、CDの英語を聞いてテキストに3×2段で描かれている絵を指でトントンタップして意味や基本文法を学ばせる学習指導方法です。

また、英語の置換ドリル(I speak English, I speak French. I speak Japanese.)や変換ドリル(I speak English, I don't speak English, Do you speak English?)や基本文をExpand(発展拡大)させる新たなアイデアを生み出しました。

つぎに、まねび先生は日本人が英語を喋れない理由の一つである翻訳する癖を取り除くために、瞬時にイメージで訳することができるように、まずは紙芝居に着眼し、そのあとに落語に着眼してきました。これにより、絵があり、ジェスチャーをすることで日本語に訳することなく英語を伝えるというピクチャートークショーというアイデアをだしました。さらに反射神経を鍛える「Listen and Point」や絵を見てパッと英語を言う「My card talking」など、子どもたちが英語を話せるようになるまでの指導法と教材のアイデアを出し続けておられます。

再び活躍する4つの顔

まねび先生は、これらたくさんメソッドのアイデアを出すために朝から晩まで考えて、寝る前まで考えて抜いたと話していました。それは、ポッキーのときと比べ物にならないぐらいの努力であったとも言われていました。なぜなら、だれでもポッキーのような商品は開発できるが、今まで何年も英語を習ってきてしゃべれない日本人の英語教育を自分のアイデアで変えるということは、非常に努力が必要であったからだと思います。しかし、グリコのときに培った考えて考えて考え抜くという力と、関心をもって大脳生理学を

勉強し発想のメカニズムを学んだという今までの発想の積み重ねこそが、いまの教材開発につながっていると話しています。漫画を描けるまねび先生であったからこそ子どもが英語を理解するための絵を描くことができ、落語ができるまねび先生であったからこそ英語にジェスチャーを用いて英語を伝えるということを教えることができ、幼いときから英語ができた経験をしていたまねび先生だからこそ幼児・児童英語を教えることができ、考えて考え抜くというアイデアマンであったからこそ人が思いつかないような幼児・児童の英語教育を発明することができたんだと思います。そして、今も日本の英語教育を変革しようと執筆活動に励んでいらっしゃいます。

おわりに

「はじめに」のところで述べさせていただいた「4つの顔」がわかっただけででしょうか。1つ目の顔である漫画家、2つ目の顔である開発マン、3つ目の顔である英語落語家、4つ目の顔である先生というこれらの顔が今の魅力いっぱいのまねび先生を形成している。と、わたしはまねび先生のキャリアを聴かせていただいた今そう思います。4つの顔にもあるようにさまざまなキャリアをまねび先生は今まで積まれてきました。しかし、「日本の英語教育を変える」という大志は一度もぶれていないと感じます。それは、もちろん私がまねび先生と出会った中学生のときから今も変わっていません。今回インタビューさせていただき、その大志の裏に隠された、これまでのまねび先生の歩みを知ることができました。そこから私は、「大志をもち、それを遂げるようと懸命に努力する大切さ」を学ばせていただきました。

私には、「人々が住みやすいと思えるまちをつくる」という大志があります。その大志を遂げるためには、まねび先生のように歩みをとめず、努力し続けることが重要であると気づかせていただきました。

謝辞

快く他人史を引き受けてくださったことに感謝します。インタビューを通じてまねび先生の人生に触れ、一緒に80年間のキャリアを振り返る時間を過ごさせていただきました。これは、私にとって本当に貴重な経験です。他人史はここで締めくくりますが、まねび先生の人生は続いていきます。私もまねび先生のように大志をもってこれからの人生を歩んでいきます。私のみならず、たくさんの方がまねび先生の他人史から人生の指針を学ばせていただくことができたと思います。まねび先生の協力がなければ、このような素晴らしい他人史は完成することはなかったと思います。本当にありがとうございました。

キャリアモデル：境山 哲夫（さかいやま てつお）

プロフィール：

鹿児島県鹿屋市出身で、中学3年のときに鹿児島市へ移る。鹿児島県立鶴丸高校に進学。大学は、関西に移り神戸商科大学(現在の兵庫県立大学)に通う。牛乳販売業を営んでいた従兄弟のもとで牛乳配達の手伝いをしていた。大学2年の春、高校1年先輩のTさんと出会い、伊丹で「学生塾」を立ち上げる。大学卒業後、江崎グリコに入社、ポッキーチョコレートとクリームコロンのアイデア発想と開発に携わる。退社後は英語落語をはじめ、スカパーの英会話番組で英語落語「ちりとてちん」が放映される。そのあと、ループ先生に協力していただき幼児・児童英語教室をつくる。今までの発想の積み重ねによりSSTメゾットを考案する。今では、まねび学園(まねびSSTクラブ本部)と称して、全国に350以上のフランチャイズをもち、今までにSSTセミナー受講者は2000人を超える。今も児童英語を変革しようと執筆活動に励んでいる。

インタビュー日時：2019年5月18日 12:30-13:30, 5月23日21:00-22:00

インタビュー場所：カフェ

取材・執筆者：中井夏子（関西学院大学 総合政策学部 都市政策学科 2学年）

作成：2019年6月3日